

◇左のページで写真を使わせていただいた千田完治さんは、定年退職後、趣味で撮った作品が、あちこちの写真展で入賞したりとかなりの腕前のようです。そんな千田さんが、ふともらした言葉が忘れられません。「カメラがデジタルになってから、写真に迫力がなくなりました。どういふことか」というと、ネガフィルムをカメラにつめこんで撮っていた時は、フィルムもそここの価格だし、現像代もかかる。そう思うと、シャッターを一度押すにも気力が満ちていた。それが、デジタルになって、保存も削除も自在だから、気軽にバシバシ撮れる。それは便利で素晴らしいことなのだが、「迫力がなくなつた」といふのです。

◇写真といえば、毎年八月十五日が近くなると、よく新聞などに掲載される熊谷大空襲の写真があります。撮影したのは佐藤虹二氏（一九一〜九五）。お檀家です。その虹二氏も言っておられます。「シャッターを切る時あの瞬間の手ごたえは忘れられない。獵人が獲物を落とした時にも似た境地がある」と。詳しくは拙書『おうちで禅』、202ページに書きました。

後編 集記

◇デジタルの写真にまつわる話をひとつ。あるお婆さんが、お孫さんの成人式に家族で食事をしたのだそうです。その時に撮った写真をお婆さんが、「小さな電話（スマホ）の画面で見せてくれるだけ。紙に現像してくれない」とグチるのです。お婆さんの気持ちわかるけど……。

◇写真を趣味としている方も多いでしょう。この場合の趣味は英語でいうと、hobby。辞書は「向上心を持ち、一人で長時間打ち込む活動」と説明してくれまふ。そうか、大人数でワイワイやるのは、趣味ではないのか。

◇一人といえば、『孤独のグルメ』という漫画があります。テレビ化されていて、何度も再放送され、現在まで続く静かな人気番組のようです。主人公の井之頭五郎が、仕事の合間に立ちよつて食事するグルメ漫画ですが、一人で食事するから「孤独」です。しかも、初めての店で何を食べるかも、他人に相談しないで、自分だけで決めるから、「孤独」です。孤立はいけないけれど、孤独は好い。仏教は凜とした「孤独のすすめ」の宗教なのでは。そんなテーマではじまる、四月からの連載を書き始めています。そのことは、後日また。

写真を撮るのも、撮られるのも、好きではありません。撮るほうは、センスがないから良い画にならないので諦めています。撮られるのも、良い男に写らないから、「撮って！撮って！」なんて自分からは決していわない。

そんな私なんかよりも、もっと徹底した知人がいて、旅行中の集合写真にも絶対に入らない女性がいまふ。なぜなのか。「写真を撮られると、魂までとられる」と、信じているらしい。

カメラがはじめて渡来してきた幕末ではあるまいし、「魂がとられる」とはたいそうな、と思つた。

ところで、「写真」という熟語。読み下すと、「真を写す」となります。よく出来た言葉だと思いませんか。おそらく、写真機が日本に入ってきたた、江戸時代末期か明治の文明開化の時代に造られた翻訳語だろう、などと想像するのは、浅はかな不勉強者のトンチンカンな推測といふもの。

調べてみると、十三世紀、中国は元の時代に編



写真 千田完治

集された禅の書物に、「谷川の水が真を写して、細い影が清い（溪水真を写して、瘦影清し）」という詩の一節があるし、仏教経典にも、「写真言」とか「写真像」という表記があるから、「写真」といふ言葉には、長い歴史がありそうです。

そんな古い熟語を、十九世紀の最先端技術にあてはめたのがすごい。最近では外国から入ってくる言葉をなんの工夫もせずに、そのままカタカナで表記してしまうのも味気ない。でも、中国には漢字しかないから、今でもすべてを翻訳しているらしい。たとえば、現代中国語でウイルスは、「病毒」と言つたって。怖そうだ！

さて、檀家の千田完治さんの写真を掲げました。夕陽の景色です。でも、お正月だから、「初日の出」とタイトルをつけても、通用するのではないかとすると、わかつていそうで、わからないのが真実です。

(住職記)

連続シリーズ「見つけた」

禅にこんな問答があります。原文は漢文ですが、現代語に超訳してみます。修行僧がお師匠さんに尋ねます。「道とは何ですか」「道か、その垣根の外にあるやないか」「そんなちっぽけな道ではありません。天下の大道を尋ねているんです」「大道か、それならば新幹線が通り、高速道路もあるじゃないか」



「大道長安に透る」といふ禅語の語源になっている問答です。つまり、仏教といっても、禅といつても、特別なものではなくて、日常生活の中にくらでもあるよ。といったところでしょうか。そこで、街頭に禅を探し、現代に仏教を見つけるコーナーをつくりました。

「寿」の字は、福岡市・博多にある聖福寺（しょうふくじ）の現住職、細川白峰（びやくほう）老師のご染筆です。

聖福寺のキャッチフレーズは、「扶桑最初禅窟（ふそうさいしよせんくつ）」つまり、日本で一番はじめの禅寺。なにしろ、中国から祖師禅を最初に伝えた栄西禅師（一一四一〜一二二五）が開いたお寺ですから、京都にある本山・妙心寺よりも古い。現住職は百三十三世だといふから、歴史の重さを感じます。

重い歴史のなかで、軽く洒脱な墨跡と逸話で博多の町衆に慕われた住職に仙厓（せんがい）禅師（一七五〇〜一八三七）がおられます。



い……これがすなわち堪忍といふ心持ち。堪忍のなる堪忍は誰もする、ならぬ堪忍するが堪忍。堪忍の袋をつねに胸にかけ、破れたら縫え破れたら縫え、東照神君家康公の申されたことだそうだとさとして。そして、「手折（たお）らるる人に薫るや梅の花」と加賀千代女の句を引いたあとに、「気に入らぬ風もあるうに柳かな」と、どんな風でもさらりと受け流してやりすぞと、柳の心がまえを教える一節があります。「気に入らぬ風もあるうに柳かな」は仙厓禅師作ではなくて、その頃、流行していた句なのかもしれない。流行歌を墨跡にする禅僧。粹ではないですか。

禅師が書かれた「○□△」の洒落た墨跡をどこかでご覧になった方も多いでしよう。現在では仙厓筆の多くが、東京・丸の内にある出光美術館のコレクションとなっています。

そうした墨跡の中でよく知られたものに、柳の画に添えた「気に入らぬ風もあるうに柳かな」の句があります。五七五で春の季語、「柳」もあるから俳句なのでしょうが、禅師ご自身の作なのか？。この句が登場する落語もあるから、当時流行っていた戯れ歌なのかもしれない。「天災」といふ落語に、次のような噺があるのです。麻生芳伸編『落語百選 秋』（ちくま文庫）から拝借します

大店（おおだな）のご隠居が、めっぽうけんかつ早い八五郎に、喧嘩相手は「探しちゃアいけな

さて、まん中に掲げた「寿」の字の背後に何やら袋が書かれています。これは何のなのか。もしかしたら、堪忍袋かも。家康がおつしやつたといふ、「堪忍の袋をつねに胸にかけ、破れたら縫え破れたら縫え」といふ文句が胸にひびきます。だれだって、我慢できずに発散してしまうこともある。それは、それでよい。でも、もう一度我慢してみる。苦勞人で現実主義者の家康らしい名言です。と、書いてきて、何かに似ているな、と気がつきました。そうそう、緊急事態宣言みたいなものです。ゆるめて、しめて、またゆるめて。新しい年も続くのかな。